

## 令和7年度 真庭市総合教育会議 次第

日 時：令和7年12月23日（火）  
午後1時30分～

場 所：真庭市役所本庁舎3階応接室

1 開 会

2 市長あいさつ

3 協議事項

- ・少子化社会の中、地域全体でこどもを育むための体制のあり方について

4 その他

5 閉 会

## 人生 100 年時代の「共育」と学びの再定義：100 年続く旅の始まり

### ー 2040 年の真庭市民は人生を楽しんでいます ー

真庭市教育委員会

## I. 少子化と支援の充実が突きつける課題と構造的な問題

### 1. 少子化の加速と求める資質・能力の肥大化

- 真庭市は 20 年前と比較し、出生数が 57.4%減と少子化が加速している状況に直面しています。
- 人生 100 年時代を迎える中で、人生の「豊かさ」や生きる「楽しさ」をいかに描くのが問われています。
- 少子化は相対的に大人の数が増えることにつながりますが、大人の抱く「危機感」や「期待」が子どもへの過剰な期待や重荷となり、良かれと思った支援が「重荷」となっている可能性があります。
- 不透明な時代を幸せに生きていくためとして、子どもに求められる能力（知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性など）は肥大化し続けています。

### 2. 「不都合な現実」と日本社会の構造的課題

- 手厚い支援や教育の充実が進む一方で、子どもたちの精神的幸福度は **38 か国中 37 位**と低い水準にあります（2025 ユニセフ調査）。
- 不登校児童生徒数は過去最多の **35 万 3,970 人**であり、暴力行為やいじめの認知件数も増加しています。
- この現状は、支援が足りないのではなく、「**支援の方向**」そのものが間違っている可能性を示唆しています。
- 古い社会システムと子どもの間に生じた「三つの呪縛」が、子どもの挑戦意欲と主体性を奪っています。
  - **強烈な「同調圧力」**：「みんなと同じ」が正義とされ、異質なものが排除される。
  - **「正解主義」と「不寛容」**：単一の物差しへの過度な信頼や、一度レールを外れると戻れない恐怖。失敗が許されない社会が子どもを冒険から遠ざけている。
  - **大人社会の「疲弊」の投影**：「社会は変えられない」という低い自己効力感（18 歳意識調査で「自分で国や社会を変えられると思う」は 18.3%）が子どもに伝染している。

### 3. 「支援」という名の「管理」の罫からの脱却

- 「不透明な時代を幸せに生きるため」として肥大化する学習や期待が、子どもの暮らしから「余白」を奪い、主体性を育んでいません。
- **「転ばぬ先の杖」**：大人が障害物をすべて除去することは「自分で乗り越える経験」の喪失につながり、結果的に打たれ弱い心や\*\*低いレジリエンス（回復力）\*\*を生みます。
- **「子どものお客様化」**：子どもが常に「サービスを受ける側（受益者）」となり、「お膳立てされた体験」では、「**誰かの役に立っている**」という**自己有用感**が育まれません。

## II. 人生 100 年時代の学びの再定義と実践の鍵

### 1. 時間軸の変更：完成品作りから「100 年続く旅の始まり」へ

- かつての旧モデル（教育のフロントローディング）は、～22 歳で完成し、あとはそれを切り崩して働くというものであり、「良い学校、良い会社」のレールから外れることへの恐怖心と過度な競争を生みました。
- **新モデル（ライフサイクルとしての学び）**は、～100 歳まで学び、変化し続けることを前提とします。
  - ～20 歳は「基礎づくり」と\*\*「好き」を見つける期間\*\*と位置づけられます。
  - 「後からでも学べる」という心の余裕が、目先の競争から解放し真の成長を促します。

### 2. 「こどもまんなか」の真の実現と大人の役割の再定義

- 「こどもまんなか」は、大人が子どもに奉仕したり、何かを教え込んだりすることではなく、**大人が「子どもが自分で育つ」ことを支え、見守り、自らが学び楽しむ**ことです。
- **大人の「ご機嫌」が安全基地となる**： 大人が本気で楽しみ、子どもと一緒に機嫌よく笑っている状態こそが、子どもの「心理的安全性」を確保します。
- 大人が楽しむ姿は子の「安全基地」となり、安心して外の世界へ挑戦する意欲を生みます。
- **「大人の背中」が最高の地域教材**：
  - 大人がライフキャリア教育や郷育（地域を楽しむ）を実践し、子どもと一緒につくることで、「大人って楽しそう」「この町は面白い」という実感が得られます。
  - これが地域への誇り（シビックプライド）を育み、将来の U ターン、I ターンにつながる「正の連鎖」となります。

### 3. 「人つなぎ」と「拠点」による活動量の増加

- 人口減少時代において追求すべきは、人口という「数」ではなく、\*\*人の「循環」と「活動量」\*\*です。
- **自然発生は困難**： 子どもの声や地域を聴き、それを支えるための「人つなぎ」を進める**コーディネーター**の存在が不可欠です。
- **学校・図書館・地域もハブ化（拠点化）**： 学校・図書館・地域も含めて、多世代が行き来し、大人も学び活動し楽しむ「人つなぎのプラットフォーム（拠点）」へとアップデートします。
  - コミュニティ・スクールから**スクール・コミュニティ**への移行が目指されます。
- **ライフキャリア教育の推進**： 地域の魅力的な大人（ライフキャリアを体現しているひと）と出会い、対話し、一緒につくる活動をすべての年代を通じて活動の軸に位置づけます。

## III. 結論：未来への投資

- 子どもは大人になるためだけでなく、\*\*「今を幸せに生きる」\*\*ことを応援することが重要です。
  - 子どもたちが将来、「故郷は楽しかったな」「あんな大人になりたいな」と思い出せる風景を、今、大人が作れているかが鍵です。
  - 人生 100 年時代、大人も子どもと共に育つ仲間として、自ら学び、変わり、楽しむ「大人の「ご機嫌」が、子どもの幸せと地域の未来を切り拓く力となります。
-